修正日本文法教科書

文部省檢定濟

大槻文彥著

下

3175.9
Ot21
資料室

30330
教科書文庫
3
815
41-1901
2000302631

375.3
O121

資料室

文部省檢定濟

明治三十四年九月二十六日　中學校國語科用

文學博士　大槻文彥著

修正日本文法教科書

東京
大阪

開成館藏版

廣島大學
教
40099
圖書

修正日本文法教科書下卷目次

第一章　助動詞の意義……一
第一節　助動詞の活用法……一
第二節　所相の助動詞……二
第三節　勢相の助動詞……三
第四節　使役相の助動詞……四
第五章　敬相……五
第六節　指定の助動詞……九
第七節　打消の助動詞……一一
第八節　時……一四
一　現在……一四
二　過去……一五
三　未來……一七
第九節　推量の助動詞……二三

第十節。比況の助動詞……二三
第二章。助動詞の誤……二九
第一節。修止法の誤……二九
第二節。連體法の誤……三一
第三節。動詞との連續の誤……三二
一。所相、勢相の助動詞……三二
二。使役相の助動詞……三三
三。指定の助動詞……三四
四。打消の助動詞……三五
五。過去の助動詞……三六
六。推量の助動詞……三八
第四節。他の助動詞との連續の誤……三九
第三章。豆爾乎波の承け方……四六
第一節。「と」……四六
第二節。「へ」、「に」……四九

第三節。「や」、「か」……五〇
第四節。「ば」……五一
第五節。「とも」、「ども」……五三
第六節。「に」、「を」、「が」……五七
第七節。「で」……六〇
第四章。感動詞の承け方……六四
第一節。「かな」……六四
第二節。「なむ」……六五
第五章。複文……六七
第一節。聯構文……六七
第二節。挿入文……七五
第六章。結法……八一
第一節。尋常の結法……八一
第二節。「ぞ」、「なむ」、「や」、「か」の結法……八一
第三節。「こそ」の結法……八二

第四節　命令、禁止の結法……八三
第五節　挿入文の結法……八三
第六節　聯構文の結法……八五
第七章　呼應……八八
第八章　温習雜題……九三

修正日本文法教科書下卷目次終

名	名	名	名	名
川	川	川	川	川
書	書	書	書	書
郵便局	名川郵便局	名川郵便局	名川郵便局	名川郵便局

第三表　助動詞の活用。

その一．活用の動詞に似たるもの。

	第一轉	第二轉	第三轉	第四轉	第五轉	第六轉
不定法（本體）						
中止法（連體法）						
第一終止法（第二終止法）						
第三終止法（命令法）						
所相	れ らーれ	れ らーれ	る らーる	るる らーるる	るれ らーるれ	れよ らーれよ
勢相	れ らーれ	れ らーれ	る らーる	るる らーるる	るれ らーるれ	
使役相	せ さーせ しーめ	せ さーせ しーめ	す さーす しーむ	する さーする しーむる	すれ さーすれ しーむれ	せよ さーせよ しーめよ
指定	なら たーら	なーり たーり	なーり たーり	なる たーる	なれ たーれ	たれ
打消	ず	ず	ず	ぬ	ね	
過去	て な たーら せーら	て に たーり せーり けーり	つ ぬ たーり せーり けーり	つる ぬる たーる せーる けーる	つれ ぬれ たーれ せーれ けーれ	てよ ね
未來			む けーむ	む けーむ	め けーめ	
推量			らーむ	らーむ	らーめ	

その二．活用の形容詞に似たるもの。

	第一轉	第二轉	第三轉	第四轉
中止法（本體）				
副詞法（連體法）				
第一終止法	べーく	べーし	べーき	べーけれ
第二終止法	ごとーく	ごとーし	ごとーき	
第三終止法	まーじく	まーじ じ	まーしき じ	まーじけれ じ
指定		き	し	しか
比況		らし	×らし	らし
打消				
過去				
推量				

×印の「じ」に、第二終止法の用例なく、「らし」に、連體法の用例なし。

その二。活用の形容詞に似たるもの。

	中止法（本體）	副詞法	第一終止法	第二終止法	第三終止法
第一轉	べーく	ごとーく	まーじく	き	らし
第二轉	べーし	ごとーし	まーじ	し	×
第三轉	べーき	ごとーき	まーじき	しか	らし
第四轉	べーけれ		まーじけれ		

△推量ノミ打消良行四轉第一轉

推量	過去	打消	比況	指定

×印の「じ」に、第二終止法の用例なく、「らし」に、連體法の用例なし。

	未來	過去	打消	指定	使役相	勢相
		てなたらせら	ず	ならたら	せさせしめ	れられ
		てにたりせりけり	ず	なりたり	せさせしめ	れられ
らーむ	むけーむ	つぬたりせりけり	ず	なりたり	すさすしむ	るらる
らーむ	むけーむ	つるぬるたるせるける	ぬ	なるたる	するさすしむる	るるらる
らーめ	めけーめ	つれぬれたれせれけれ	ね	なれたれ	すれさすれしむれ	るれられ
		てよね		たれ	せよさせよしめよ	

△諸四轉良行四轉外ニ三轉「べし」

△「たり」名詞ニモ「ず」一轉

四段奈行良行ニモ其外しむ全體

同じ

第四表。動詞と助動詞との連續。（一）

	能相	所相	相勢	敬相	使役相
第三轉		第一轉	第一轉	第一轉	第一轉
四段活用 よ(讀)ーむ	よーま	よーま	よーま	よーま	よーま
奈行變格 し(死)ーぬ	しーな	しーな	しーな	しーな	しーな
良行變格 あ(有)ーり	あーら	あーら	あーら	あーら	あーら
上二段活用 い(生)ーく	いーき	いーき	いーき	いーき	いーき
下二段活用 う(受)ーく	うーけ	うーけ	うーけ	うーけ	うーけ
上一段活用 き(着)ーる	き	き	き	き	き
下一段活用 け(蹴)ーる	け	け	け	け	け
加行變格 く(來)	こ	こ	こ	こ	こ
佐行變格 す(爲)	せ	せ	せ	せ	せ
	る	る	る	す	しむ
	らる	らる	らる	さす	

第五表。動詞と助動詞との連續。（三）

	第一轉	第二轉	第三轉	第四轉
四段活用	さ(咲)―か	さ―き	さ―く	さ―く
上二段活用	い(生)―き	い―き	い―く	い―くる
下二段活用	う(受)―け	う―け	う―く	う―くる
上一段活用	き(着)	き	きる	きる
下一段活用	け(蹴)	け	ける	ける
加行變格	こ(來)　ず　む　じ	き　つ　ぬ　たり　けり　けむ　し、しか×	く　らむ　べし　まじ　らし	くる　なり　ごとし
佐行變格	せ(爲)　おは(御座)―せ　じ　し、しか×	し　つ　たり　けり　けむ　き(し、しか)×	す　おはす	する　おはする
奈行變格	い(往)―な　ず　む　じ	い―に　つ　たり　けり　けむ　き(し、しか)	いぬ	いぬる
	し(死)―な	し―に	しぬ	しぬる
良行變格	あ(有)―ら	あ―り	あり	ある
	を(居)―ら	を―り	をり	をる
	はべ(侍)―ら	はべ―り	はべり	はべる
				なり　ごとし　らむ×　べし×　まじ×　らし×

この表には、四段、上二段、下二段、上一段の各活用よりは、各、一語を擧げて例とせり、他は、準へて知るべし。

連續すべき助動詞は、「き」を除く外は、皆その本體のみを示せり、その各轉は、推して知れ。

表中、×印あるものは、異則の連續をなすものなり。

第一轉　第二轉　第三轉　第四轉　第五轉　第六轉

不定法　連用法　中止法　終止法　連體法　已然法　命令法

不体　連用言　截斷言　連體言　已然言　命令

	下二段活用	上一段活用	下一段活用	加行變格	佐行變格	奈行變格	良行變格
第一轉	う(受)ーけ	き(着)	け(蹴)	こ(來)	せ(爲) おは(御座)ーせ	い(往)ーな し(死)ーな	あ(有)ーら を(居)ーら はべ(侍)ーら
接續	む	じ		ず む じ ×し、しか	ず む じ ×し、しか	ず む じ	ず む じ
第二轉	うーけ	き	け	き	し おはし	いーに しーに	あーり をーり はべーり
接續	けり	けり けむ き(し、しか)	けり けむ き(し、しか)	つ ぬ たり けり けむ ×し、しか	つ ぬ たり けり けむ ×き	つ たり けり けむ き(し、しか)	つ ぬ たり けり けむ き(し、しか)
第三轉	うーく	きる	ける	く	す おはーす	いーぬ しーぬ	あーり をーり はべーり
接續				らむ べし まじ らし	らむ べし まじ らし	らむ べし まじ らし	
第四轉	うーくる	きる	ける	くる	する おはーする	いーぬる しーぬる	あーる をーる はべーる
接續				なり ごとし	なり ごとし	なり ごとし	なり ごとし ×らむ ×べし ×まじ ×らし

この表には、四段、上二段、下二段、上一段の各活用よりは、各、一語を擧げて例とせり、他は、準へて知るべし。

連續すべき助動詞は、「き」を除く外は、皆その本體のみを示せり、その各轉は、推して知れ。

表中、×印あるものは、異則の連續をなすものなり。

第一轉	第二轉	第三轉	第四轉	第五轉	第六轉
不定法	連用法 中止法 名詞法	本体 終止法	連體法 終止法	条件法	命令法
将然言	連用言	截断言	連體言	已然言	命令

第六表。助動詞と助動詞との連續。（三）

	第一轉	第二轉	第三轉	第四轉
所相勢相	れ られ れ られ じ む ず しむ	れ られ れ られ き けむ けり たり ぬ つ	る らーる る らーる す さーす しーむ らし まじ べし らむ	るる らーるる るる らーるる する さーすそ しーむる なり
使役相	せ さーせ しーめ じ む ず らる	せ さーせ しーめ き けむ けり たり ぬ つ	なーり らし べし まじ らむ	なーる らし べし らむ
指定	なーら じ む ず	なーり き けむ けり つ	たーり	たーる らし まじ べし らむ なり
打消	ず	ず	ず	ぬ なり
過去	て な む	て に き けむ けり たり	つ ぬ らし べし らむ	つる ぬる なり
	たーら む ず	たーり せーり き けむ けり つ	たーり	たーる せーる らし らむ なり
	せーら む	けーり き つ	けーり	けーる らし らむ なり
未來			む	む なり
推量			けーむ	けーむ
			らーむ	らーむ

推量	未來		過去			打消	指定	
				せーら む	たーら む ず	な む	て	ず	たーら じ む ず しむ	なーら じ む
			けーり き つ	せーり き け けむ け り つ	たーり	に き け け む け り た り	て き け け む け り	ず	たーり き け け む け り つ	なーり
らーむ	けーむ	む	けーり	せーり	たーり	ぬ らし べし らむ	つ	ず	たーり	なーり
らーむ	けーむ	む なり	けーる らし らむ なり	せーる らし らむ なり	たーる らし べし らむ なり	ぬる なり	つる	ぬ なり	たーる らし まじ べし らむ なり	なーる らし べし

第七表。動詞、形容詞、助動詞と呂爾乎波の

「ば」、「ども」、「ど」、「ども」との連續。

			未定	未定	既定
動詞と活用の動詞に似たる助動詞と	第一轉	四段	さ(咲)—か	さ—く	さ—け
		上二段	い(生)—き	い—く	い—くれ
		下二段	う(受)—け	う—く	う—くれ
		上一段	き(着)	き—る	きれ
		下一段	け(蹴)	け—る	けれ
		加行變格	こ(來)	く	くれ
		佐行變格	せ(爲)	す	すれ
		奈行變格	い(往)—な	いぬ	いぬれ
		良行變格	あ(有)—ら	あり	あれ
		所勢相	れ	る	るれ
		相	ら—れ	らる	らるれ
		使役相	せ	す	すれ
		役相	さ—せ	さす	さすれ
		指定	し—め	しむ	しむれ
		定	な—ら	なり	なれ
		打消	た—ら	たり	たれ
		消	ず	ず	ね
		過去	て	つ	つれ
		去	な	ぬ	ぬれ
		過去	た—ら	たり	たれ
		去	せ—ら	せり	せれ
		過去	……	けり	けれ
		未來	……	む	め
		未來	……	けむ	×け—め
		推量	……	らむ	×ら—め
			ば	ども	ば、ど、ども

形容詞と活用の形容詞に似たる助動詞と	第一轉	久	よ(善)—く	よ—く	よ—けれ
		志	あ(惡)—しく	あ—しく	あ—しけれ
		久志			
		志			
		幾			
		幾			
助動詞		指定	べ—く	べ—く	べ—けれ
		定	ごと—く	……	……
		況	ま—じく	ま—じく	ま—じけれ
		比況			
		打消	……	……	しか
		過去	ば	ども	ば、ど、ども

表中、×印ある三助動詞「め」、「けめ」、「らめ」は、「ど」、「ども」には連れど、「ば」には連らず。

動詞

四段	さ(咲)ーか	さーく	さーけ	さーけれ	
上二段	い(生)ーき	いーく	いーくれ	いーくれ	
下二段	う(受)ーけ	うーく	うーくれ	うーくれ	
上一段	き(着)	きる	きれ	きれ	
下一段	け(蹴)	ける	けれ	けれ	
加行變格	こ(來)	く	くれ	くれ	
佐行變格	せ(爲)	す	すれ	すれ	
奈行變格	い(往)ーな	いーぬ	いーぬれ	いーぬれ	
良行變格	あ(有)ーら	あーり	あーれ	あーれ	

助動詞

所勢相	れ	る	れ	る	
	ら—れ	らーる	らーれ	らーれ	
	せ	す	すれ	すれ	
使役相	さ—せ	さーす	さーすれ	さーすれ	
	しめ	しむ	しむれ	しむれ	
指定	なーら	なーり	なれ	なれ	
	たーら	たーり	たれ	たれ	
打消	ず	ず	ね	ね	
	て	つ	つれ	つれ	
	な	ぬ	ぬれ	ぬれ	
過去	たーら	たーり	たれ	たれ	
	せーら	せーり	せれ	せれ	
	……	けーり	けれ	けれ	
未來	……	む	×め	×め	
	……	けむ	×けーめ	×けーめ	
推量	……	らむ	×らーめ	×らーめ	
	ば	とも	ば・ど・ども	ば・ど・ども	

形容詞と活用の形容詞に似たる助動詞と

第一轉	よ(善)ーく	よーく	よーけれ	よーけれ	
	あ(惡)ーしく	あーしく	あーしけれ	あーしけれ	
第一轉	べーく	べーく	べーけれ	べーけれ	
	ごとーく	……	……	……	
	まーじく	まーじく	まーじけれ	まーじけれ	
	……	……	しか	しか	
	ば	とも	ば・ど・ども	ば・ど・ども	

形容詞

久志幾	志久志志幾	

助動詞

指定	べーく	べーく	べーけれ
比況	ごとーく	……	……
打消	まーじく	まーじく	まーじけれ
過去	……	……	しか
	ば	とも	ば・ど・ども

表中、×印ある三助動詞「め」、「けめ」、「らめ」は、「ど」、「ども」には連れど、「ば」には連らず。

廣島大學圖書之印

修正 日本文法教科書下卷

第一章。助動詞の意義。

第一節。助動詞の活用。法。

例。 孝子は、人に譽められむ(不定法)、孝子は、人に譽められ、世に尊ばる(中止法)、孝子、人に譽められる(第一終止法)、孝子ぞ、人に譽められゝ(第二終止法)、孝子こそ、人に譽められれ(第三終止法)、人に譽められよ(命令法)、孝子あり(連體法)、汝ら、人に譽め

右の例にて「らる」といふ助動詞も、亦、語尾に、活用あり、法あることを、知り得べし。かく、助動詞にも、すべて、活用あり、法あ

るなり、而して、その狀の、動詞に似たると、形容詞に似たると、あり、また、その活用と法との趣は、略、動詞、形容詞に異ならざれど、連用法と、名詞法とを、成さぬもの多し。第三表は、助動詞の各轉に、法を配當したるものなり、よく諳んじおくを要す。」助動詞も、その第一終止法を本體とす。以下、助動詞を例に擧ぐるに、多く本體のみを用ゐる。他の各轉は、推して知るべし。

能相
所相

第二節。所相の助動詞。

例。人、われを知る。　われ、人に知らる。
人、孝子を譽む。　孝子、人に譽められる。

右の二例の「知る」、「譽む」は、おのが能くする動作なれば、これを**能相**といひ、「知らる」、「譽められる」は、おのが受くる動作なれば、これを**所相**といふ。動詞は、すべて、能相をあらはすものなれば、その所相をいふには「る」、「らる」、といふ助動詞を用ゐる。この二語は、その意、相同じく、「る」は、四段活用、奈行變格、良行變格の第一轉に連り、「らる」は、その他の動詞の第一轉に連る。この助動詞は、口語にては、次の如く轉じて用ゐらる。

われ、人に知られる。　孝子、人に譽められる。

勢相の助動詞

第三節。勢相の助動詞。

例。われは、一時間に、十枚寫さる。
われも、この問には答へらる。

右の二例なる「寫さる」、「答へらる」は、いづれも、「寫し得」、「答へ得」の意なり。かく、すべて、動作を、己が力にて、よく爲し得る意にいふ時は、「る」、「らる」、の二助動詞を用ゐる、これを**勢相の助動詞**といひ、その動詞に連る規定は、所相の助動詞の「る」、「らる」

に同じ。口語にては、「寫される」、答へられる」、となること、亦、所相の助動詞の如し、或は四段活用にては、その第五轉に「る」を添へても用ゐる、「寫せる」、「勝てる」、の如し。又、

夏休、待たる。　時のうつるも忘れらる。

の如く用ゐられたる「る」、「らる」は勢相より轉じて、動作の自ら起りて、とゞめられぬが如き意をあらはすなり。口語にても、この助動詞、轉じて、「夏休、待たれる」、時のうつるも忘れられる」、となること、所相の助動詞の如し。

第四節。　使役相の助動詞。

例。　先生、弟子に、本を讀ます。
父、子に、朝早く起きさす。
先生、弟子に、本を讀ましむ。

使役相の助動詞

父、子に、朝早く起きしむ。

右の例なる「讀ます」、「起きさす」、「讀ましむ」、「起きしむ」は、いづれも、他を使役して、「讀む」、「起く」、などの動作を爲さしむるものにて、これに要する助動詞「す」、「さす」、「しむ」を、使役相の助動詞といふ。この三助動詞、意、同じくして、「す」は四段活用、奈行變格、良行變格に連り、「さす」は、その他の諸活用に連り、「しむ」は、通じてあらゆる動詞に連りて、いづれも、その第一轉を承く。口語にては、「す」を「せる」に、「さす」を「させる」に、「しむ」を「しめる」に轉じて用ゐる。

第五節。　敬相。

例一。　父上、かくこいはる。
例二。　陛下、觀兵式に臨ませ給ふ。

例の一なる「る」は、勢相の助動詞にて、こは、その第一終止法なり、例の二なる「せ」は、使役相の助動詞「す」の第二轉にて、こは、その連用法なり。されど、この二語、かく用ゐらるゝ時は、全くその意義を變じて、他の動作を敬ひ言ふ語となる、これを**敬相**といふ。而して、使役相の方は、大抵、「給ふ」、「おはす」、などいふ語と連用せらる。また使役相の第一轉に、勢相を重ね用ゐて、

敬相

天皇陛下には、正殿に臨ませらる、

などいふときは、一層重き敬語となる。

口語にて、敬相をあらはす時には、「る」は「れる」に、「らる」は「られる」に轉ず。

以上、所相、勢相、使役相の助動詞の、他の助動詞を承くることある時、その連續の規定は、動詞と連續する規定に同じく、皆その第一轉に連る。これらの事は、第四表と第六表とに就きて、よくおぼえおくべし。

次の諸文に就きて、所相、勢相、使役相、敬相の助動詞を求めて、各、その何法なるかを示せ。

例。兩陛下には、君が代の奏樂のうちに、正殿にのぞませられ、やがて、玉座につかせ給ふ。

のぞませられ、　せは、使役相の助動詞「す」の第一轉、られは、勢相の助動詞「らる」の第二轉(中止法)にて、相重りて、重き敬相となれるもの。

つかせ給ふ、　せは、使役相の助動詞「す」の第二轉(連用法)にて、「給ふ」に連り、敬相となれるもの。

例。敵兵、逃れらるゝ道なきを知りて降る。

逃れらるゝ、　らるゝは、勢相の助動詞「らる」の

第四轉（連體法）。

一、神武天皇、筑紫より、安藝の海をすぎさせ給ひて、吉備の國に着かせ給ふ。

二、清國、李鴻章等を遣して和を請はしむ。

三、北京にある公使等は無事なり、との公報、傳へらる。

四、そのころの士風、武を嗜みしことぞ知らるゝ。

五、まづ、佐々木が先陣を、よく合點して見られ候へ。

六、秀吉は、殊に擢でられ、大任を負はしめらる。

七、維新の後、使を朝鮮に遣して、舊交を繼がしめむとせらる。

八、未成年者禁烟法は、明治三十三年四月一日より、實施せらる。

九、よろづ繰合せられ、かならず御來車なし下され候やう願上候。

十、教師、生徒に讀ますること數回の後、講義せらるゝものにせさす。

指定の助動詞

第六節。　指定の助動詞。

例。生徒は、今日試驗を受くるなり。

學科は、國語なり。

風景に富むこと、世界第一たり。

今日も行く人あるべし。

汝等、父母の命に從ふべし。

右の例なる「なり」、「たり」は、共に、「にて、あり」の意にて、事物を指し定め、「べし」は、心に推し量りて指定し、又、強く指定して、命令する意の語なり。　この三語を、**指定の助動詞**とし、その動詞に連る法は、「なり」は諸活用の第四轉に、「べし」は良行變格の第四轉と、餘の諸活用の第三轉とに連り、「たり」は名詞の下にのみ付きて、動詞には連らず。「なり」は、又、獨立動詞の如く、直に、

名詞、又は、副詞、豆爾乎波にも連りて、指定の意をいふ。

この語の、動詞、又は、他の助動詞と連續する規定は、第五表と第六表とに就きて、よくおぼえおくべし、以下の諸助動詞もこれに倣へ。

次の諸文に就きて、指定の助動詞を求め、そのいかに用ゐられたるかをいへ。

例。無用の者は入るべからず。

べからず、　指定の助動詞「べし」の第一轉（副詞法）「べく」の、良行變格「あり」の第一轉（不定法）「あら」に連り、約りて、べからとなれるなり。

一。神戸なる湊川神社は、正成を祀りし所なり。

二。これぞ、人の敎のかゞみなる。

三。成功は急ぐべからず。

四。われらは、何の業をかつとむべき。

五。かくてこそ、文明國の人たる風儀といふべけれ。

六。こたびの試驗に、優等たらむ者は、君等のみなるべし。

七。わが國家は實に和氣靄然たる四千萬同胞の一家なり。

八。人の人たる道は、容易く成就すべきものならむや。

第七節。打消の助動詞。

打消の助動詞

例。花は咲かず。

花は咲くまじ。

花は咲かじ。

右の三例は、共に、「咲く」といふ動作を打消す意あり、これに用ゐる助動詞「ず」、「まじ」、「じ」を、打消の助動詞とす。「ず」は、動作を、そのまゝに打消す語にて、動詞の諸活用の第一轉に連り、「まじ」は、推量して打消す語にて、諸活用の第三轉と、良行變格の

第四轉とに連り、「じ」は、「まじ」の意の、稍強きものにて、諸活用の第一轉に連る。「ず」は、連用法によりて、良行變格の「あり」と連る時は、「さり」と約るを常とす、「咲かず、ある花」の、「咲かざる花」となるが如し。

「ず」は、口語にては、その第四轉「ぬ」に轉じて、これを終止法とし、兼ねて連體法にも用ゐること、「花は咲かぬ」、「花咲かぬ樹」の如く、「まじ」は、音便に「まい」といひて口語に用ゐること、「花は咲くまい」の如し。

次の諸文に就きて、打消の助動詞を求め、それが、いかに用ゐられたるかをいへ。

例。知らざることは、いはぬこそよけれ。

知らざる、　打消の助動詞「ず」の第二轉(連用法)

「ず」の「あり」の第四轉(連體法)「ある」に連り、約りて、ざることなれるものなり。

いはぬ、　「ず」の第四轉(連體法、下に連るべき名詞「こと」は、略せられたるなり)。

一、わが友は、まだ遠くは行くまじ。
二、汝は、遙にかれに及ばじ。
三、知らざるを、知らずとせよ、これ知るなり。
四、このめでたき席に、不參するぞ心得ぬ。
五、このたびこそは、行くまじけれ。
六、これは、たれも、忘るまじきことぞ。
七、雪こそ降らぬ、さえかへる嵐やいかに寒からむ。
八、明日、散歩に、御同伴なし下さるまじく候や。
九、矢玉ふるなかも、怖れず進め。
十、頼朝、舍弟の蒲冠者にも賜はず、寵臣梶原にも賜はぬ生唼を、高綱に賜ひき。

第八節。時。

例一。　鳥、飛ぶ。　月、落つ。
例二。　鳥、飛びぬ。　月、落ちき。
例三。　鳥、飛ばむ。　月、落ちむ。

例の一なる「飛ぶ」、「落つ」は、その動作の最中なるをいひ、例の二なる「飛びぬ」、「落ちき」は、その動作の既に終りしをいひ、例の三なる「飛ばむ」、「落ちむ」は、その動作の未だ起らぬをいふ。かゝる動作の差違を、動詞の時といひ、これに現在、過去、未來の三樣あり。

時

現在

一。　現在。

例。　鳥、飛ぶ。　月や、落つる。　われこそ、告ぐれ。
往ぬる友。　報知あり。

右の例なる動作は、今その最中なるをいふ。これを現在とす。

過去

二。　過去。

例。　鳥、飛びぬ。　月や、落ちたる。　われこそ、告げつれ。
往にける友。　報知ありき。

右の例なる動作は、皆、その既に終りたるをいふ。これを過去とし、「つ」、「ぬ」、「たり」、「けり」、「き」の五助動詞を、動詞諸活用の第二轉に連ねて用ゐる。但し、「ぬ」のみは、奈行變格には絶えて連らず。また、「き」は、その語尾の「き」、「し」、「しか」の三轉、相別れて、加行變格、佐行變格の第一轉にも連ること、次の表の如し。

	第一轉	第二轉
加行變格	こ(來)　き	き　し　き
佐行變格	せ(爲)　し おは(御座)　せ　しか	し　し おはし　しか

「來き」、「來き」の例なし。
「爲き」、「坐せき」、「爲し」、「坐し」、「爲しか」、「坐しか」の例なし。

「つ」の第一轉「て」と、「たり」とが、動詞の伊の段の音に連る時は、次の音便を生ずることあり。

咲い(咲き)て、　泳いだり(泳ぎたり)。　(き、ぎは、いに轉ず)。

言う(言ひ)て、　言つ(言ひ)て、

買う(買ひ)たり、　買つ(買ひ)たり。　(ひは、う、又は、つに轉ず)。

讀んで(讀みて)、　飛んで(飛びて)、　(み、びには、んに轉ず)。

死んだり(死にたり)。

勝つ(勝ち)て、　乘つ(乘り)たり。　(ち、りは、つに轉ず)。

さて、口語にては「たり」を、「た」とのみいふ、「泳いだ」、「買うた」、「買つた」、「死んだ」、「乘つた」の如し。これらを、連體法にも用ゐて、「泳いだ者」、「買うた人」、「買つた紙」、「死んだ友」、「乘つた馬」などともいふ。

「けり」は、又、唯、語氣を強うせむが爲に用ゐることあり。

例。　余は、勉強せり。　友は、志を明にせり。

右の例なる「せり」も、過去の意をいふ助動詞にて、獨立動詞の如く用ゐられ、名詞、又は、副詞にのみ添ひて、動詞にはつかず、その意は、「爲(シ)て、あり」といふが如し。

例。　鳥、飛べり。　時計の針は、正午を示せり。

右の例なる「飛べり」、「示せり」も、また、過去の意をいふにて、「飛び、て、あり」、「示し、て、あり、」など解すべく、かく、轉用せらるゝは、四段活用の動詞に限ることにて、その語尾の各轉の狀と、法とは、略、良行變格に同じ。

以上、過去をあらはす語は、相重用することもあり。　その連續の法は、第六表によりて、略、知ることを得べし。

三。　未來。

例。　鳥、飛ばむ。　月や、落ちむ。　われこそ、告げめ。

未來

往なむ友。　報知あらむ。

右の例なる動作は、皆、その未だ起らぬを豫めいふにて、これを未來とす。未來には、動詞諸活用の第一轉に、助動詞の「む」を連ね用ゐる。

口語にて未來をあらはすには、四段、奈行變格、良行變格は、「む」を「う」に轉じて、各動詞の第一轉に連ね、上二段、下二段、上一段、下一段、加行變格は、別に「やう」といふ語を第一轉に連ね、佐行變格は「む」を「う」に轉じて、第一轉に連ね、又は「やう」を第二轉に連ぬること、次の如し。

鳥飛ばう（四段）、　われも往なう（奈行變格）、　報知あらう（良行變格）、

早く起きやう（上二段）、　明日答へやう（下二段）、　新聞を見やう（上一段）、　鞠を蹴やう（下一段）、　友も來やう（加行變格）、

勉強せう、勉強しやう（佐行變格）。

例一。　鳥、飛びなむ。　月や、落ちたらむ。　われこそ、告げてめ。　往にたらむ友。　報知ありなむ。

例二。　鳥、飛びけむ。　月や、落ちけむ。　われこそ、告げけめ。　往にけむ友。　報知ありけむ。

右等は、いづれも、その動作は過去に屬すれども、未だ分明ならぬをいふ。これには、過去の助動詞「つ」、「ぬ」、「たり」の三助動詞の第一轉なる「て」、「な」、「たら」に、未來の助動詞「む」を重ねて用ゐ、或は、別に「けむ」といふ助動詞を、動詞諸活用の第二轉に連

ね用ゐる。

「けむ」は、また「つ」、「ぬ」、「たり」の第二轉なる「て」、「に」、「たり」、などの過去をいふ語に連りて「て」、「けむ」、「に」、「けむ」、「たり」、「けむ」、などゝ用ゐらるゝことあり。その連續の法は、第六表に就きて、略、知ることを得べし。

次の諸文に就きて、終止法、連體法に用ゐられたる時を說明せよ。

例。なりのぼり、富み榮えむこそ、父母にも、先祖にも、孝行ならめ。

榮えむ、「榮ゆ」の第一轉榮えに、未來の助動詞「む」の第四轉（下に連るべき名詞「事」の略せられたる連體法）むの連りたるなり。

ならめ、獨立動詞の如き力ある、指定の助動詞「なり」の第一轉ならに、未來の助動詞「む」の第五轉（第三終止法）めの連りたるなり。

一、天は、自ら助くる者を助く。
二、東の方には、青山四周の美地あり。
三、我が將卒は、もとより死を期せり、なゞて戰の難易を思はむ。
四、このたびこそは、失敗を回復せめ。
五、讀みたる後に、書取りたりき。
六、過ぎし日の運動會こそ、實に樂しかりしか。
七、これらの道理をこそ、かへす〳〵も諭しつれ。
八、この隨筆は、そのころ見聞せしことゞもをしるしゝものなり。
九、この物語は、世の普く知れる所なり。
十、若し、物もや落し給へる、その袋は、われら拾ひたり。いざ、返しまゐらせむ。
十一、この人、ことに刀劍の鑒定に妙を得たりき。
十二、瓶に水の滿ちたるを、小性兩人してかき出だす。

十三、人々に飲ませける後、勝家は、薙刀の石突にて、瓶を砕きたり。

十四、何者の供に候ひて、かゝる不思議をぞふるまはせたりけむ。

十五、太刀つかふこと、少しも心得ざらむには、刀、脇差、腰にせむこと誠に不用の事にや、

十六、幽齋は、この度、その身討死したらむ後、敷島の道、長く絶えなむことを悲めり。

十七、關原の一戰にして、天下の權は、全く德川氏にぞ歸しける。

十八、昔の盛なりしさまは、夢にも見ること、難くなりにき。

十九、年こそあまた過ぎにたれ、今日は、かの脇差盗まむと思ひよりしその月のその日なり。

二十、雲ゐる山も、塵泥よりぞなれりける、書よむみちも、理のみはひとつなり。

推量の助動詞

第九節。推量の助動詞。

例。雨、降るらむ。　臨時試驗、あるらむ。

雨、降るらし。　臨時試驗、あるらし。

右の二例にて、「降る」、「ある」の動詞に添へ用ゐられたる「らむ」、「らし」は、物を推量する助動詞なれば、**推量の助動詞**といふ。この二語は、共に、動詞諸活用の第三轉に連れど、良行變格にのみは、その第四轉に連るを法とす。

比況の助動詞

第十節。比況の助動詞。

例。年月は流るゝごとし。　花は雲のごとし。

右の例なる「ごとし」は、比ぶる意をいふ語にて、これを**比況の助動詞**といふ。この語は、動詞、助動詞の第四轉と、形容詞(若しくは、活用の、形容詞に似たる助動詞)の第三轉とに連り、又

豆爾乎波の「の」、「が」の下にも用ゐらる。

次の諸文の中にて、推量の助動詞と、比況の助動詞とを求め、そが、いかに用ゐられたるかをいへ。

例。櫻花は、今、見頃なるらし、見にゆくらむ人ら、停車場に、雲の如く群れり。

なるらし、　らしは、推量の助動詞にて、こゝには、指定の助動詞「なり」の第四轉なるに連ねて、その第二轉（第一終止法）を用ゐたるなり。

ゆくらむ、　らむは推量の助動詞にて、こゝには、四段活用「ゆく」の第三轉ゆくに連ねて、その第四轉（連體法）を用ゐたるなり。

雲の如く、　如くは比況の助動詞にて、こゝには、豆爾乎波のの下につゞけて、その第一轉

（副詞法）を用ゐたるなり。

一、今宵は、滿月なるらし。
二、風景ゑがける如し。
三、花咲くらむ時は、いかに美しかるべきか。
四、霜雪を凌ぎてこそ、梅は芳しき花を開くらめ。
五、酒井氏は、昨日ぞ上京したるらし。
六、君は、かの事を知らぬ如く思はる。
七、聯合軍は、いつか北京を去るらむ。
八、帝國萬歳の聲、湧くが如し。
九、放言高論して、傍に人なきごときは、學生の最も忌むべき事なり。
十、敵は、案の如く、城を遁げいだせり。
十一、今朝の如き地震は、ちかごろ稀なり。
十二、かの國民は、外國人を、夷狄の如くおもへるらし。
十三、耳目は窓の如く、口鼻は出入口のごとし。
十四、かくの如きを、眞の勉強家とやいふらむ。

十五、その身は、露の如く失せぬとも、芳しき名は、幾千代までもにほふらむ。

○

次の諸文に就きて、助動詞を求め、その意義と用法とを說明すべし。

例、いはほに取りつき居たる二人、をり〳〵浪の上に現はれて見ゆるは、得も上らぬなるべし。

居たる、　過去の助動詞「たり」の第四轉(連體法)。
現はれて、　過去の助動詞「つ」の第二轉(連用法)。
上らぬ、　打消の助動詞「ず」の第四轉。
なる、　指定の助動詞「なり」の第四轉。
べし、　指定の助動詞、第二轉、(第一終止法)。

一、余は、種々彼れに、思ふ所を語り聞かせたり。
二、これぞ、天幸といふものならむ。

三、たゞ、芝の如き草のみ生ひたり。
四、浪風の響、山ものこるまじう轟きたり。
五、わが軍の奮戰せしさまは、これにても知らる。
六、人々、山畑なる芋ほりて、もて來ぬ。
七、同じく飛び入りたる人々、いづくに泳ぐらむ、と知らず。
八、奇樹、異草、名も知らず、目なれぬもの、いと多し。
九、大御臺所、高德の僧どもに仰せつけられ、祈禱せさせ給ふ。
十、長四郎君は、袋に入れられ、封印をつけられ給へり。
十一、かゝる人、引具し行かむこと、いかにも叶ふべからず。
十二、これより下山せむこと、生涯の遺憾なるべし。
十三、鎭遠、いそぎ來て定遠を助け、わづかに沈沒をまぬかれしめたり。
十四、母君、ちひさくては、きくまじとて、大きなる灸を、數々するさせ給ふ。
十五、高島秋帆は、外國の人に交らぬは公道に背き、御國のためにあしかりなむと、言ひ爭ひき。
十六、綱切りてよど叫べど、彼方の船には、人ありとも見えず。

十七。敵も、身方も、いたく疲れたらむ、各方面、いづれも休戰せり。

十八。いと暗き夜に、破れたる船ども、浪の間にうち合ひ、漂ひぬ。

十九。かくいみじき風になりぬべしとは、夢にも思ひより侍らざりき。

二十。やう〳〵風吹きまさるに、今は、船よりおりてむと思ふ。

廿一。空は墨をすりたらむ樣なる中に、濃き薄き雲見えて、龍などいふ神も、かけるらむと覺ゆ。

廿二。同じ樣に泊れりし船、百ばかり、一つ浪風に吹き集められ、ゆり漂はさる。

廿三。艦長坂本少佐は、はじめより死を期したりけむ、大膽にも、われに十倍せる敵艦、定遠、鎮遠の間に馳せ戰へり。

廿四、この度の大地震には、おきてもあられず、寢ねてもあられざりき。

廿五、船は、いかになりぬらむ、さりとも、みながらは碎け果てじ。

廿六。わが船、たちまち傾きて、海の底に入りなむとす。

廿七。われらの學校に入りしは、去年とこそ思ひしか、今は第二年級に上りぬ。

第二章。助動詞の誤。

第一節。終止法の誤。

例一。鼠は、猫に捕へられる。わが先生は、深切に教へらるゝ。僕も、賞品をもらへる。吾が弟は、學校へ行きし。芳しき名、永く殘りける。

例二。誰か、譽めらる。これぞ、名物なれ。かくなむ、申されたり。雨や降るべし。

例三。實に、第一等の品とこそ言はるゝ。君こそ、賞品をもらはれる。昨日こそ、袷着し。その時の狀は、さこそありけむ。

右、例の一なる諸文は、尋常の文なれば、第一終止法を用ゐ、例の二なるは、「ぞ」、「なむ」、「や」、「か」の豆爾乎波、上にあれば、第二終止法を用ゐ、例の三なるは、上に、「こそ」の豆爾乎波あれば、第三終止法を用ゐて、結ぶべきなり。されば、右の例なるは、皆、非なり、第三表に據りて、次の如く正さずはあるべからず。

一、鼠は、猫に捕へらる。わが先生は、深切に敎へらる。僕も、賞品をもらはる。わが弟は、學校へ行き。芳しき名、永く殘りけり。

二、誰か、譽めらるゝ。これぞ、名物なる。かくなむ、申されたる。雨や降るべき。

三、實に、第一等の品とこそ言はるれ。君こそ、賞品をもらはるれ。昨日こそ、袷着しか。その時の狀は、さこそありけめ。

第二節。連體法の誤。

例。敵に覺らる恐あり。少年に金錢を持たすことは、害あり。樂みて試驗を受けさす樣にす。發言せむとする者に、手を擧げしむ例なり。

右の例なる「らる」、「す」、「さす」、「しむ」は、いづれも、下、名詞に連りたれば、連體法を用ゐるべきに、かくては、みな非なり。第三表によりて、次の如く正すべし。

「覺らるゝ恐」、「持たすること」、「受けさする樣」、「擧げしむる例」、

又、打消の助動詞「ず」の連體法「ぬ」と、未來の助動詞「む」の連體法「む」とを、誤りて混じ用ゐることあり。例へば、「譽めむ者なし」は、「譽めぬ者なし」の誤なるがごとし。

第三節。動詞との連續の誤。

一。所相、勢相の助動詞。

例一。先生は、かく仰されたり。

例二。昨日船遊されし人々、今日請待され給ふ。

右、例の一なる「仰され」は、勢相より變じて、敬相となれる如くなれと、かくては非なり。「仰す」は、佐行下二段活用なれば、これを勢相とせむには、その第一轉「仰せ」に、助動詞「らる」を連ぬべきなり。而して、こゝには「らる」の第二轉を要するが故に、改めて、「仰せられたり」と正すべし。

例の二なる「船遊され」は、勢相より變じて、敬相に用ゐ、「請待され」は、所相に用ゐたるが如くなれども、これも非なり。すべて、名詞(漢語、外國語、熟語なるも)は、佐行變格の「す」と合ひて、

熟語の動詞となり、その所相、勢相をなすには、この「す」の第一轉「せ」に、助動詞の「らる」を連ぬるを法とす。されば、「船遊せられし人」、「請待せられ給ふ」と改めずはあるべからず。この類の誤は、頗る多し。

二。使役相の助動詞。

例一。君は、われに全權をまかさせらる。われは、太郎を士官學校に入學させむ。

例二。人々に、拜觀することを得せしむ。われは、かれを元に復さしむ。

例の一なる「まかさせらる」は、「まかす」といふ動詞に、使役相、勢相の助動詞を重ね用ゐて、重き敬相としたるが如くなれど、非なり、「まかす」は、下二段活用なれば、「まかせ」なるその第

一轉より、勢相「さす」の各轉に連るを法とす、されば「まかせさせらる」と改むべし。また「入學させむ」も、非なり、「さす」は、動詞の外には付かず、されば、名詞は、佐行變格の「す」と熟語を成し、「す」の第一轉「せ」より、「さす」の各轉に連るを法とす、「入學せさせむ」と改むべし。

例の二なる「得せしむ」も、非なり、「しむ」は、直にあらゆる動詞の第一轉に連るなれば、「得しむ」にてあるべし。すべて、この誤は、一音の動詞に連る時に多し。「復さしむ」も、非なり、名詞は、佐行變格「す」と合ひて熟語をなし、「す」の第一轉「せ」より、「しむ」の各轉に連るを法とするが故に、「復せしむ」と改むべし。

三。　指定の助動詞。

例一。　長髓彥なる者ありき。

例二。　物品に手を觸れべからず。

指定の助動詞「なり」は、「にて、あり」の意にて、「に、あり」の約れるものなれば、例の一の如く用ゐては、「長髓彥にある者、長髓彥にてある者」となりて、語を成さず。これは、「長髓彥といふ者」とすべきなり。また、例の二の「觸れべからず」の「べからず」は、「べくあらず」にて、「べく」は、指定の助動詞「べし」の第一轉（副詞法）なれば、すべて、動詞諸活用の第三轉（良行變格のみは、その第四轉）に連るを法とす、されば、「觸るべからず」と改めずはあるべからず。

四。　打消の助動詞。

例一。　君の成功を祝さゞる者あらむや。

例二。　御教示下されまじく候や。

例の一の「祝さゞる」は、「祝さずある」の約れるものとなりて、打消の「ず」の連續の法に反せり。「祝」は、名詞なれば、佐行變格

の「す」と熟語を成し、「す」の第一轉「せ」より、打消の「ず」に連るを法とす。されば、「祝せざる者」と正すべきなり。

例の二の「下され」は、四段活用「下す」の第一轉「下さ」に、勢相の「る」の轉なる「れ」を添へて、敬相としたるなり。而して、打消の助動詞「まじ」の第一轉（副詞法）「まじく」に連るには、第三轉より「下さるまじく候や」と改むべし。

すべきなり。されば、

五、過去の助動詞。

例一。　かれは、名を留めて死にぬ。

例二。　役員は、評議を凝らし居れり。

例三。　名産を買ふてよと、書ひて送る。

過去の「ぬ」は、奈行變格には連らざれば、例の一の「死にぬ」は非なり、「死にたり」など改むべし。例の二なる「居れり」は、「居り

てあり」などと解すべき一種の過去として、用ゐらるべきがごとくおもはるれど、「居り」は、良行變格活用なれば、正しからず、この種の過去を成すは、四段活用に限る、されば、「居たり」などすべし。例の三なる「てよ」、「て」は、共に、過去の「つ」の轉じたるものなれば、すべて、動詞諸活用の第二轉に連るを法とす。されば、正しくは、「買ひてよ」、「書きて送る」と書くべし、或は、音便にて、「買うてよ」、「書いて送る」、させむは、妨なし。

例四。　弟は、學校よりかへり來き。工業、大に發達せき。

例五。　この藏を建築しし時こそ、實に、かの家は、繁榮の頂に達ししか。

例六。　これは、去年寫せしものなり。

過去の助動詞「き」は、動詞諸活用の第二轉に連るを通則とすれども、加行變格、佐行變格には、異則ありて、「こき」、「きき」、「しし」、「しか」、「せき」、の例なし。されば「かへり來けり」、「發達しき」、「建築せし時」、「達せしか」、とやうに、例の四、五なるを改むべく、「寫しっ」とやうに、例の六なるを改むべし。

六。推量の助動詞。

例。明日の會には、大議論も出づるらむ。夜も、はや明くるらし。

推量の助動詞「らむ」、「らし」は、いづれも、動詞諸活用の第三轉(良行變格のみは第四轉)に連るを法とす、されば、右の例なるは、「出づらむ」、「明くらし」、とやうに改むべきなり。

第四節。他の助動詞との連續の誤。

助動詞と助動詞との連續は、第六表に據りて、よく諳んじおきて、誤らざるやう心すべし。今、次に、その陷りやすき誤ある數例を示さむ。

「明日、許可せらるゝべし」。「いつ頃、試驗を行はるゝらむ」。「委しく說明せしむるらし」。「書、讀まして試る」。「かれに、贊成せさしき」。「一同に、軍歌を歌はしたり」。

右の例の「べし」、「らむ」、「らし」などは、所相、勢相、使役相の各助動詞の第三轉にのみ連り、「て」、「き」、「たり」などは、その第二轉にのみ連るを法とするが故に、この例の如く用ゐたるは、皆、非なり。「許可せらるべし」、行はるらむ」、說明せしむらし」、讀ませ

て」、「賛成せさせき」、「歌はせたり」、こやうに改むるを要す。

○

次の各動詞に、所相、指定、未來の各助動詞を添へて、その第一、第二、第三の三終止法を用ゐたる三樣の文を作れ。

例。許す。

この會社は、日ならず、設立を許さるゝならむ。（第一終止法）。

この會社や、日ならず、設立を許さるゝならむ。（第二終止法）。

この會社こそ、日ならず、設立を許さるゝならめ。（第三終止法）。

一。見る。　置く。　閉づ。　廢す。

二。告ぐ。　尋ぬ。　出版す。　實施す。

次の各動詞に、使役相、打消の各助動詞を添へて、その連體法を用ゐたる文を作れ。

例。棄つ。

衛生掛は、この處に、芥を棄てしめぬ樣取締りつ。

三。動く。　耻づ。　捕ふ。　見る。　死ぬ。　缺席す。

次の各動詞に、所相（或は、勢相）と、使役相と、推量と、の各助動詞を用ゐて、文を作れ。

例。作る。

明日は、われら、論文を作らしめらるらし。

四。記す。　起く。　唱ふ。　着る。　居り。　論ず。

次の各動詞に、打消の助動詞を添へ、その三樣の終止法を用ゐて、各、三文を作れ。但し、皆、敬相とするを要す。

例。厭ふ。

先生は、説明の勞を厭はれず。（第一終止法）。
先生ぞ、説明の勞を厭はれぬ。（第二終止法）。
先生こそ、説明の勞を厭はれれ。（第三終止法）。

五、忘る。　射る。　住む。　好む。　咎む。　案ず。

次に定めたる如くに、各、二文を作れ。

六、比況、指定、所相の各助動詞を用ゐて。

例。生徒は、教へらるゝ如く讀むなり。

七、打消、推量、指定、使役、相の各助動詞を用ゐて。

例。成績は、知らしめぬ規則なるらし。

次の各動詞を用ゐて、現在、過去、未來等の文を作れ。

八、誘ふ。　落つ。　見ゆ。　おはす。（以上、第一終止法を用ゐよ）。

例。兄、弟を誘ふ（現在）。　兄、弟を誘ひき。　兄、弟を誘ひてき（以上、過去）。　兄、弟を誘はむ（未來）。　兄、弟を誘ひたらむ。　兄、弟を誘ひてけむ（以上、過去の未來）。

九、釣る。　植う。　教ふ。　欲す。（以上、第二終止法を用ゐよ）。

十、語る。　暮す。　勤む。　勉強す。（以上、第三終止法を用ゐよ）。

十一、禁ず。　貸す。　凱旋す。　研究す。　月見す。（以上、連體法を用ゐよ）。

例。喫烟を禁ずる法、定めらる（現在）。　山林の濫伐を禁ぜし効、あらはれたり。　貿易を禁じたりし餘弊、今に存せり（以上、過去）。　永く交通を禁ぜむ事、難し（未來）。　暫く外出を禁じたらむ方、よかるべし。　奢を禁じたりけむ遺訓は、すたれたり（以上、過去の未來）。

○

次の諸文の誤れるをば正し、口語なるをば文章語に改めよ。

一、この處に、塵芥、捨てることならぬ。

二、人々よ、無益に時間を費せぬやう、心得るべきことにこそ。

三、強き敵なりとて、怖れるべからず、弱き者なりとて、侮るべからず。

四、鳥を射せしめられし時、かれは、悉く中てり。

五、誰か、この答を求め得べし。

六、出る杭は、打たれる。

七、父に乞ふて、われは、海軍兵學校に入れり。

八、村人に案内さしたるに、かれ、よく名所を敎へり。

九、かの地に、旅行されし人、かくこそ語られき。

十、先登し、日本軍は、名譽ある日章旗を樹てゝ、天皇陛下萬歲を唱へり。

十一、君は、擊劍をや學びたり、と友は問ふていひぬ。

十二、この圖をなむ、第一等といふべかりけり。

十三、綠樹、影沈むで、魚、樹に上り、月、海上に浮んでは、兎も波を走る。

十四、賴朝、幕府を鎌倉に置ゐて、武家政治の基をぞ開ひたれ。

十五、山里に住める身は、人こそ來ず、自然の友には、いつも訪はるゝ。

十六、かれは、再び不養生はするまじと、この時にぞ、はじめて悟りたりき。

十七、愚なる人に譽められうより、賢き人に毀られないやうせよ。

十八、かくまで、友に信用されぬ汝の行末こそ、案じられる。

十九、われらは、ネルソンなる豪傑が、トラフアルガアにて、大戰爭をなせしことを學びし。

二十、雄辯流る如く、聽く者をして、直にその說くところに服さしめたり。

次の漢文を、正しく國文に書き下すべし。

一、重宗、弟曰重昌、俱以聰敏稱。

二、祐成父祐泰、嘗爲祐經所殺、奪其曾我莊。

三、吾爲將種、弓馬刀槍吾學之。

四、命賈人平價給之。

五、汝雖幼、已過十歲、猶能記吾言。

六、越前侯忠直之臣、有杉田壹岐者、起步卒列國老、常好直諫、以匡救君過爲務。

第三章。互爾乎波の承け方。

第一節。「と」。

例一。正成、なほ生く、と聞く。花美し、と見る。

例二。兩國、開戰したり、と傳へらる。

例三。正成ぞ、なほ生くる、と聞く。花なむ、美しき、と見る。兩國や、開戰したる、と傳へらる。

例四。正成こそ、なほ生くれ、と聞く。花こそ、美しけれ、と見る。兩國こそ、開戰したれ、と傳へらる。

永く生きよ、と祈らる。花美しかれ、と願ふ。開戰せしめよ、と論ず。

右の四例の如く、互爾乎波の「と」の、動詞、形容詞、助動詞を承くる時は、その終止法か、命令法か、すべて、意の切るゝ所を承くるを則とす。又、

予は、井上君と伊藤君とを訪はむ。

生徒は、代數と幾何との初歩とを學びたり。

生徒は、代數と幾何の初歩とを學びたり。

など用ゐる「と」は、同趣の語を接續するものにて、幾處にても加ふるを則とす。されば、「井上君と伊藤君を訪はむ」、代數と幾何の初歩を學び」、など、略すれば、その意明ならず。

次の諸文に、誤れるところあらば、正すべし。

一。今夜の月は、いつ頃にか出づと問ふ。

二。次の日曜日には、われ伯父上と博覽會を見にゆかむ。

三、かれは、先日歸朝せしと語れり。

四、われは、土佐日記と神皇正統記の註釋を求めたり。

五、砂と砂糖を混じて得たるものも、一の混合物なり。

六、鐘詰の食料品は、久しき年月を歴るといへども、決して腐敗せず。

七、友は、二圓を費せし、といへり。

八、時計の分針と時針が、一時と二時の間にて重り合ふ時間を算出せよ。

九、それにては、たのもしからずこそ候ふといひしかば、諸臣、皆、迷惑して、辭なかりしとぞ。

十、よきといひて譽むるも、あしといひて毀るも、その場合を考ふべきなり。

十一、竹中重治、わが病いゆる事ありがたきと聞きて、さらば、軍中にこそ死なむとて、播磨國に馳下り、平山の陣にして空しくなりぬ、三十六歳とぞ聞えけり。

十二、父の語り聞かせつると、我がまのあたり見つるを、おもひつゞくれば、百年の變遷、歴々として、目の前にあるが如し。

第二節。「へ」「に」。

例一。　車に乗りて、坂に上る。

例二。　歐洲へ行く船は、西へ航す。

例の一なる互爾乎波の「に」は、動詞の動作の移るべき地位を示し、例の二なる「へ」は、方向を示す。　この二語を混用するは非なり、よく心すべし。　されば、「岸へ着く」、「前に進む」、などは誤にて、「岸に着く」、「前へ進む」、とすべきなり。

次の儲文に誤あらば、正せ。

一、橋を渡りて、右へ折れたる處に、學校あり。

二、京都の方に行くには、こゝより汽車へ乘るなり。

三、足をはこべば、栗の如くなる燒石、崩れて谷へなだれおつ。

四、われも、人も、浪の中へとび入りて、陸に泳ぎ行く。

五、右金額、此の帳面に御記入これありたく候也。

六、ある人、上方に住みけるが、仔細ありて、身を隱し、江戸に下りなむとす。

第三節。「や」「か」。

例。誤ありや、なしや。　誤あるか、なきか。　答へ得や、答へ得ずや。　答へ得るか、答へ得ぬか。

右の例の如く、指して疑ふ意の互爾乎波なる「や」、「か」の二語の、動詞、形容詞、助動詞を承くる時は、「や」は、必ず、動詞、助動詞の第三轉と、形容詞(若しくは、活用の、形容詞に似たる助動詞)の第四轉と、形容詞(若しく轉とを承け、「か」は、必ず、動詞、助動詞の第四轉と、形容詞(若しくは、活用の、形容詞に似たる助動詞)の第三轉とを承くるを法とす。又、上に、他の疑辭ある時は、下に、「か」を用ゐれども、「や」を用ゐることなし。例へば、「誰かある」、「幾許なるか」、「いかに心得らるゝか」、「なぜいふべく」、「誰やある」、「幾許なりや」、「いかに、心得らるゝや」、などは非なり。

「や」「か」

次の諸文に誤あらば、正せ。

一。この猫は、鼠を捕へたるや。
二。いつ、君は、東京に來しや、
三。英の一哩は、我が何町なるや。
四。人々、この度は到着すかと、樂み待つ。
五。議會は、可決すべきや、否決すべきやを議す。
六。富士山と新高山とは、いづれや高きか。
七。善しか惡しかは、使うて知るべし。
八。甲は、乙に、何圓を貸せしや。
九。汝は、かれが、いづこへ出發し、かを知れりや。

第四節。「ば」。

例一。梅、咲けば、鶯、來鳴く。　品、善ければ、買ひつ。　客、來れば、書を讀み始む。

例二。梅、咲かば、鶯、來鳴かむ。　品、善くば、買へ。

「ば」

客、來ずば、書を讀み始めむ。

「ば」は、甲乙の語句を連ぬるに用ゐる豆爾乎波にて、甲、原因となりて、乙、その當然の結果をなす意をいふ。これに、二樣の用法あり。右の例の一なるは、動詞、助動詞の第五轉と、形容詞（若しくは、活用の、形容詞に似たる助動詞）の第四轉とに接して、既定の意を成し、例の二なるは、いづれも、動詞、形容詞、助動詞の第一轉を承けて、未定の意を成す。

既定
未定

次の諸文の中の、豆爾乎波の「ば」に就きて、その、既定なるか、未定なるかを答へよ。

一、唇亡ぶれば、齒寒し。
二、良き友あれば、惡に陷らず。
三、學、若し成らずば、死すとも歸らじ。
四、雨降りいでしかば、車に乘りけり。
五、御閑暇に候はゞ、御來遊あれ。
六、塵も積れば、山となる。
七、縱覽を許されなば、行きてみむ。
八、演說せられば、參聽すべし。
九、登りて眺めば、その快さ、いかばかりならむ。
十、見て、面白くば、君に告ぐべし。

第五節。「とも」「と」「ども」。

例一。知ることも、告げじ。遠くとも、行かむ。
干渉せらるとも、恐るな。行ふべくとも、用ゐざらむ。

例二。知れど（ども）、告げず。遠けれど（ども）、行く。干渉せられど（ども）、恐れず。強かりしかど（ども）、負けぬ。

「とも」「と」「ども」の三語も、共に、甲乙の語句を連ぬる豆爾乎波

「とも」
未定「ど」「とも」
既定

なれど、甲の語句に對して、乙の語句は、反對の結果なるをいふに用ゐらる。「とも」は、動詞諸活用の第三轉と、形容詞諸活用の第一轉とを承けて、**未定**の意を成し（例の一）、「ど」、「とも」は、共に、動詞の第五轉と、形容詞の第四轉とに接して、**既定**の意を成す（例の二）。助動詞の活用の、動詞に似たるは、動詞と同じく、「とも」は、第三轉に、「ど」、「とも」は第五轉に接し、その活用の形容詞に似たるは、形容詞と同じく、「とも」は第一轉に、「ど」、「とも」は第四轉に接す（例の一、二）。

次の諸文の中より、「とも」、「ど」、「とも」を求めて、その未定、既定、いづれに用ゐられたるかを答ふべし。

一、食へども、味を知らず。
二、悔ゆとも、そのかひなからむ
三、夜明くれど、起きいでず。

四、見れども、見えず。
五、彼れ來とも、あはじ。
六、說諭すれども、聽かず。
七、死ぬとも、退くことなかれ。
八、いかに苦しくとも、屈すまじ。
九、花多けれども、見る人なし。
十、劍を學ばしめられたれど、成らず。
十一、君は、行かずとも、よからむ。
十二、見しことあるべけれど、今は忘れたり。
十三、改正せらるとも、影響なかるべし。
十四、かすみてそれとみえねども、なく鶯に誘はれつゝ、もいつしか來ぬる花のかげ。

以上、示せるが如く、「とも」は、必ず、動詞にては、その第三轉を、形容詞にては、その第一轉を、承くべきものなり。されば、「松は、千年を歷るとも、色をかへじ」、「價、貴しとも、品、善からざら

む」、などは、非なり、「歴ども」「貴くども」、と改むべし。又、

「われ、かれを招くも、かれ至らず」。　（イ）。

「敵、逆撃を試みしも、敗れき」。　（ロ）。

など、「も」のみ用ゐて、「雖」の意をいはむとするものあり。されど、「も」といふ豆爾乎波には、かゝる意、絶えてなければ、必ず、「ども」、「ど」、「ども」、三語のうちにて、未定、既定を用ゐ分くべし。右、（イ）は、未定と、既定とを混用して、その意、明ならず、「招くども、かれ至らじ」（未定）、とするか、「招けども、かれ至らず」（既定）、とするか、その意によりて、用ゐわくべし。又、（ロ）の方は、既定の意、明なれば、「試みしかども、敗れき」、と改むべきなり。

次の諸文の、誤あるは正し、口語なるは文章語に改めよ。

一、かゝる方法は、害あるとも益なからむ。

二、惡しき生徒は、罰に處せらるゝも、意とせず。　（既定）。

三、いかにいひわけするとも、用ゐられじ。

四、いふことは、易きも、行ふことは、難し。

五、鸚鵡は、よく物いひ得るも、鳥たるを免れず。

六、時は、まだ早かりしも、辭してかへりき。

七、何程さがしても、見あたらなかつた。

八、どのやうに走りても、おひつかれまい。

九、彼れには、まだあはぬも、名は聞いて居る。

十、私に、手が四本ありても、かれには及ばぬ。

第六節。「に」、「を」、「が」。

例一。　彼れに問ふに、かれも答へず。日、なほ高きに、脚は疲れたり。久しく待ちしに、つひに來らざりき。

例二。　人々、留むるを、われは、立去らむとす。

「に」「を」「が」

年、なほわかきを、いかでか、この任に當らるべき。堅く約束しつるを、などてか來らざる。

われ等は、反對するが、かれ等は、贊成す。

暑氣は、強きが、健康には、害なし。空は、晴れぬが、風は、歇みぬ。

例の一なる「に」、例の二なる「を」、例の三なる「が」は、共に、甲乙の語句をつらねて、甲に對して、乙は、事の裏返る意、又は、案外なる意をいふに用ゐらる。而して、この三語の、共に、動詞、助動詞の第四轉と、形容詞(若しくは、活用の、形容詞に似たる助動詞)の第三轉とに接すること、亦、右の三例の如し。

次の諸文の中より、事の裏返る意、または、案外なる意をあらはす豆爾乎波の「に」、「を」、「が」、を求めよ。

一、この品よきに、かれは買はず。

二、雨、いたく降れるを、いかでか、濡れざるべき。

三、人々の守り居るに、猫と、肴をぬすみ去りぬ。

四、風、いと寒きに、參詣する人多し。

五、答案、まだ成らぬに、時間盡きぬ。

六、富士山の姿、昨日まで見えしが、今朝は、浮雲絶えず立隱せり。

七、この雪夜の深更に、よもやとおぼえしに、さても、油斷なき君かな。

八、さらぬだに、生計ゆたかならざりしを、今又、不時の費用嵩みて、貧困已に迫れり。

九、立見少將は、玄武門までおしよせしが、門固くして、入ること能はざりき。

十、佐久間は、敵、人馬の行程を急ぎて疲れたる處へ、するりと押寄せ、打破らむとおもひけるに、秀吉の謀に、夜討の支度、空しく成りにけり。

第七節。「て」。

例。友に會はで歸る。　忍耐せでは、萬事成らず。
　　世に用ゐられて、身を終ふ。

右の例なる「で」は、「ず、て」の約りたるにて、「ず、して」の意なり。されば「ず」と同じく、動詞、助動詞の第一轉に接す。

次の諸文の中の「で」を求めて、その連續の法を說明せよ。

例。われは、今日も行かでであり。

一。君ならで、誰にか見せむ。
二。風吹かでは、帆舟進まず。
三。この時を過さで、着手すべし。
四。たづねもせで、計ふことやある。
五。許されでは、見ることを得ず。
六。家庭にては、夜遊せさせで、嚴しく監督せり。
七。父は父たらずとも、子は子たらでは、あるべからず。
八。色見えで、うつろふものは、世の中の、人の心の、花にぞありける。

○

次の諸文に誤あらば、正せ。

例。諸般の學科の、著るき進步を爲せしこと、古來、未だ曾てその例を見ざるなり。

爲せしこと。「爲す」は、佐行四段にて、過去の助動詞「き」の各轉に接するには、その第二轉より連るべきものなり。されば「爲しゝこと」と正すべし。

一。蜘蛛は、網を張りて、蠅、蚊などを捕へむと、企て居れり。
二。博士は、この動物に就ひて、深く研究されたることありし。
三。代價、收受せざる內は、縱令、御注文あるも、遞送せず。

四、本書は、學生に、美文の資料を得せしめ、且、作文の捷徑を知らしむ爲に、發行したるものなり。

五、かゝる問題は、いかに解するべきや。

六、委員の調査は、公にされたり。

七、一々説明すは難きも、質問せらるれば答へむ。

八、かれは、慣例等を取調ぶるの目的を以て、洋行を命じられたり。

九、今の世に、この人の如き儒者は、あるやいかゞ。

十、通筋、東に入る南側の會場におひて、常集會を開く。當日演説せむとする會員諸君は、前日までに、演題を、幹事へ報告さるべし。

十一、雨降りしも、出發せし、との報あり。

十二、今日の盛會を祝するとの電報を、山田と川村の兄弟より寄せ來れり。

十三、委員會を開ひて議するも、好結果や得難かるべしとて、多數は、反對説を唱へり。

十四、山手の方に進むで、あなたを眺めば、燈火、二つ三つ見ゆに、行くも行くも、里へ出でず。

十五、この新聞は、今まで、月曜日と祝祭日の翌日、休刊しゝも、今度、年中休まむ事に定めたり。

次の漢文を、正しき國文に書き下すべし。

一、此兒、必任負荷。

二、使人問之、卽、西行也。

三、余老矣、死不足惜。

四、義光聞義家戰不利、請往援、不許。

五、今年五十五、耳目稍衰、唯、齒不異壯時。

六、極力折之、不能折也。

七、不誠者、雖一時得利、人必知之、終歸于徒勞耳。

第四章。感動詞の承け方。

第一節。「かな。」

例。今年の春も、往ぬるかな。業、成り難き哉。
列強と、覇を爭はむかな。勇武、感ずべきかな。

右の例の如く、感動詞の「かな」は、動詞、助動詞には、その第四轉に、形容詞(若しくは、活用の、形容詞に似たる助動詞)には、その第三轉に添ふを法とす。されば、

「さても、面白き學科かな」、「雲隱れにし、夜はの月哉」、などは、「學科なるかな」、「夜はの月なる哉」、と、指定の助動詞の「なる」のあるべきを略したるなり。また、

「さかり、久しいかな」。「路、遠いかな」。

などは、「久しきかな」、「遠きかな」、の音便なり、これを、「久しひかな」、「遠ひかな」など書くは、誤なりと知るべし。

「なむ」

第二節。「なむ」。

例。われは行かなむ。百年までも生きなむ。
櫻を庭に植ゑなむ。疾く行きて見なむ。
今、歸りこなむ。月見、せなむ。冬の往ななむ。
語らふ友も、あらなむ。おのれも、學びたらなむ。

右の例なる「なむ」は、いづれも、願ひ、又は、あつらふる意をいふ感動詞なり。この語は、必ず動詞、助動詞の第一轉に添ふ。別に、過去の助動詞「ぬ」の第一轉「な」に、未來の助動詞「む」を連ねて、過去を未來にいふ「なむ」あり、これは、前に說ける如く、動詞、助動詞の第二轉に連ること、例へば、

われは行きなむ。今、歸りきなむ。月見、しなむ。語ら
ふ友も、ありなむ。

など、用ゐらる。されば、感動詞のねがひのなむと、助動詞の過去のなむとは、その動詞、助動詞に接する法によりて、區別し得らる。されども、上二段、下二段、上一段、下一段の四活用は、その第一轉と、第二轉と、同形なれば、次の如く、

百年までも生きなむことは、難し。來む春までには、櫻を庭に植ゑなむ。行きて見なむものは、誰そ。

などは、その意義によりて、過去の方と解すべし。又、

四時のうちにて、春なむよき。空の色、青くなむ見ゆる。花の散る(事)なむ惜しき。思ひいづるになむ、昔しのばるゝ。

などは、豆爾乎波の「なむ」なること、自ら明なり。

次の諸文の中より、感動詞を求めて、その用法に誤あらば、正すべし。

一、あゝ樂しひかな、春の日や。

二、流れて早き月日かな。われらは、青年の空しく過ぎなむを畏る。

三、あはや、わが事、破れなむ。

四、暮れぬ間に、家に歸らなむ、わが子ら、いそげかし。

五、この說の傳へらるゝも、また久しきかな。君等、惑はされざらなむ。

六、雞の聲なむ聞えわたれる、夜、はや、明けなむ。

七、今日なむ、花の盛なるべき、いざ行きて見なむ、散りなむ後は、かひなかるべし。

第五章。複文。

第一節。聯構文。

例一。　風、吹く。燈、消ゆ。

この「風、吹く」、「燈、消ゆ」は、いづれも、一の單文なり。而して、上なる文の說明語に中止法を用ゐる「風、吹く」を改めて、「風、吹き」といふ句とし、これに下なる文を聯絡せしむれば、

風、吹き、燈、消ゆ。

聯構文

といふ一文を成す。かくの如きを**聯構文**といふ。

例二。　天氣好し。　われは散歩せり。

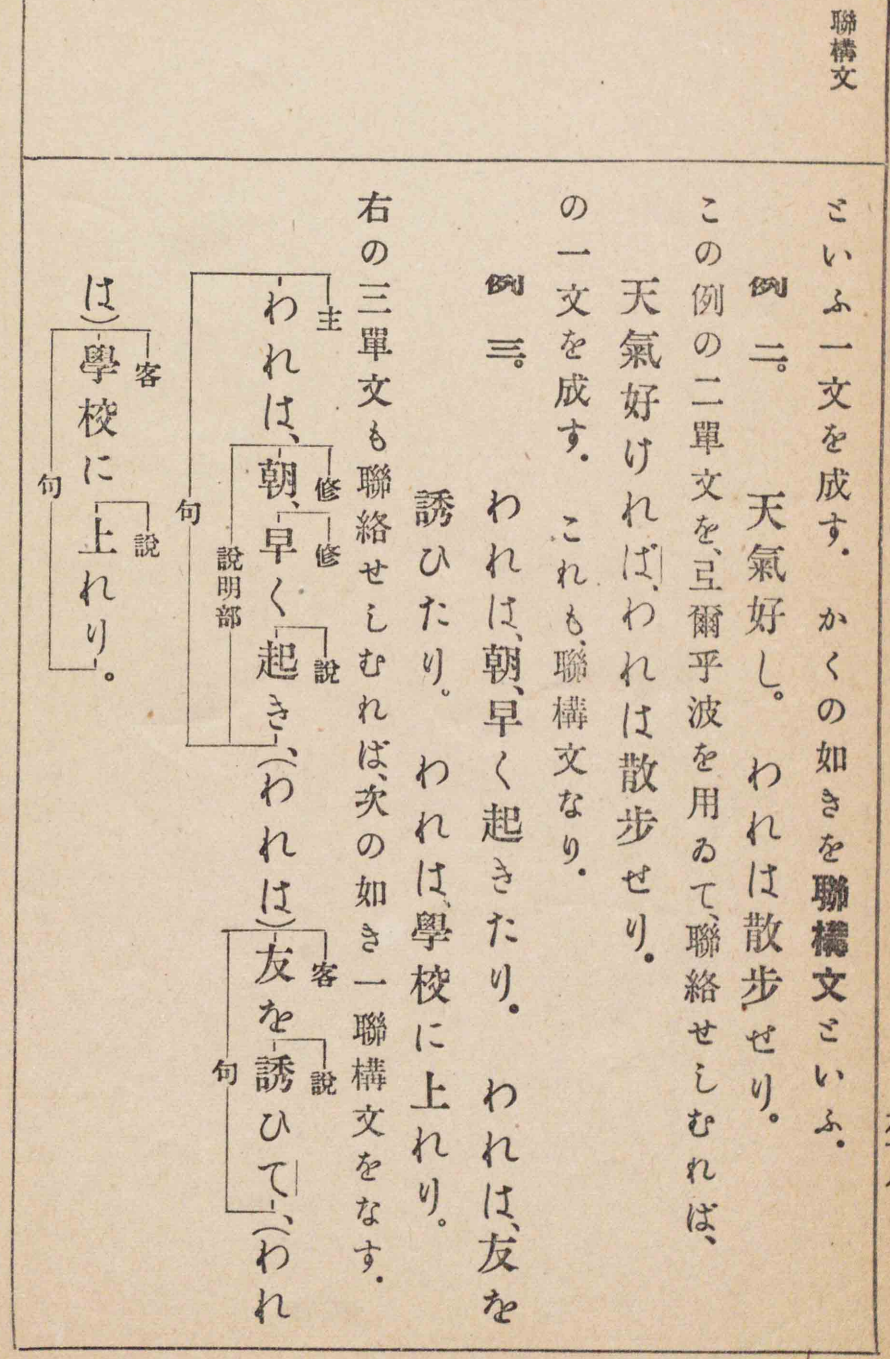
この例の二單文を、豆爾乎波を用ゐて、聯絡せしむれば、

天氣好ければ、われは散歩せり。

の一文を成す。これも、聯構文なり。

例三。　われは、朝、早く起きたり。　われは、友を誘ひたり。　われは、學校に上れり。

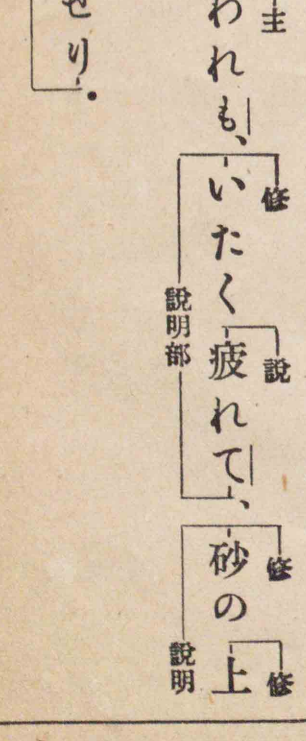
右の三單文も聯絡せしむれば、次の如き一聯構文をなす。



二單文以上を聯絡せしめて、一文に構成したるを、聯構文といふ。これを聯絡せしむるには、上なる文の説明語に、中止法を用ゐ、或は、豆爾乎波を加へて、文を變じて、句とするなり。

なほ、次の數例を見よ。

例四。　友、いたく疲れたり。　友、砂の上に坐せり。　われ、いたく疲れたり。　われ、砂の上に坐せり。



例五。

主　やまと撫子、修　さまぐに、修　おのがむき〳〵、説　咲きぬとも、修　おほしたてゝし、修　父　説明部

母の、修　庭の教に、客　たがふなよ。　客部

右の例なる「よ」は、感動詞にて、その意、全文に係れば、説明部の外に立つこと、前に説きたり。接續詞の、全句、全文を接續するものも、主部、客部、説明部の外に立つ。

例六。

修　明治二十一年四月、主　樞密院　説　置かれ、説　又、　明部

主　市町村制　説　定る。

例七。

修　人の　主　目は、修　百里の　修　遠き　客　(所)を　説　見れど　主部　客部

修　も、修　その　客　背を　説　見ず。　客部

例八。

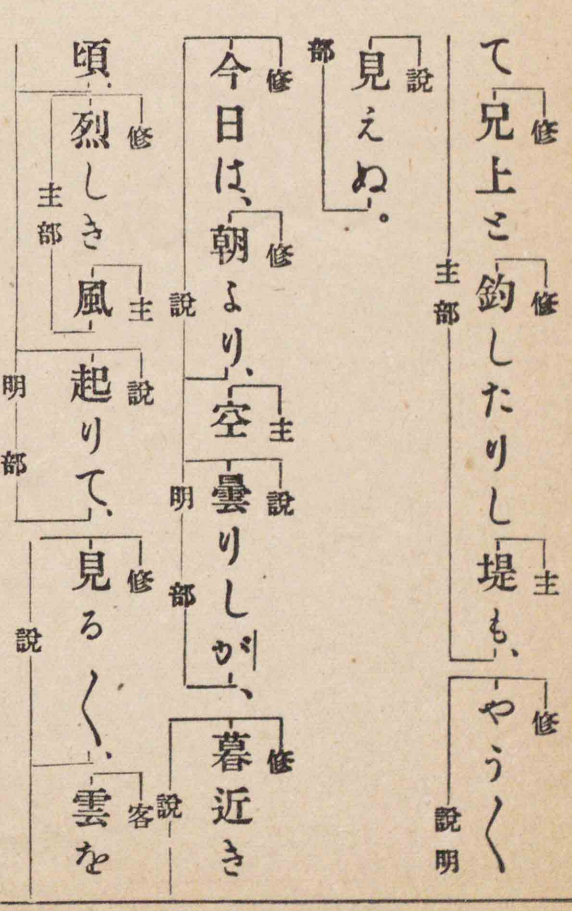
主　われは、修　わが師の、修　この地に　修　來たまへる　客　(事)を　説　聞き、修　二度、修　その　修　旅館に　説　伺候　客部　説明部

例九。

したれど、主　師は、修　いつも　説　いまさゞりき。　説明部

修　幼き時　修　攀ぢたりし　修　松の　主　樹も、　修　かつ　主部

例十。



聯構文の組織を、圖式にて示せば、次の如し。

一。例。一、二、六。

單文（主部）（客部）——（接續詞）——單文（主部）（客部）（説明部）
（説明部）

二。例。三、五、七。

主部—（客部）、説明部—（接續詞）—（客部）、説明部。

三。例。九。

主部—（接續詞）—主部—（客部）、説明部。

四。例。四。

主部—（接續詞）—主部—（客部）、説明部—（接續詞）—（客部）、説明部。

五。例。十。

單文—（接續詞）—聯構文。

六。例。八。

聯構文—（接續詞）—單文。

七.

聯構文―(接續詞)―聯構文。

次の諸聯構文を分ちて、主語、說明語、客語、修飾語、及び主部、說明部、客部を擧げよ。

一. 空、よく晴れ、月、いと淸し。

二. 山寺の鐘、遠く聞えて、秋の日は、山の端に入りぬ。

三. 余は、やう〳〵里に着きしに、家々、皆、戸を閉ぢたり。

四. 夜も、いたく更けたるを、たれか、門を叩ける。

五. 進擊の喇叭は、曉の雲を破りて、勇しくひゞきわたりぬ。

六. 他に、援兵もなかりしかば、城兵は、つひに、重圍のうちに陷りたり。

七. わが軍、三たび突貫したれど、そのかひなかりき。

八. 百一發の祝砲は、さかりに殿外にひゞきて、その聲、いと勇し。

九. われは、友と、昨日行きて見しかど、かの品は、まだ着せざりき。

十. かれの師と友とは、かれに說き勸めて、外國に遊學せしめたり。

十一. 父公、夙くより、勤王の志あつかりしかば、公も、その志をつぎて、常に大義を唱へられたり。

十二. 友は、國に歸りて、父の跡をつぎしが、われは、素志を貫かむとて、留りて、身を軍籍におきたり。

十三. 大船驛は、橫須賀の方へも行くべき追分なれば、上下する人、集散する車、ことに多かり。

十四. 富國論も、强兵論も、大和魂といふ精神を定めたる後にすべし。

十五. 第二軍は、花園河口に上陸し、金州城を陷れ、大連灣を取り、遂に旅順の砲臺を奪ひ、その一部は、榮城灣に上陸して、威海衞を攻め、これを陷る。

第二節。　挿入文。

例一。　巡査は、賊を追跡せしかど、時、おそかりけむ、遂に、空しく歸り來ぬ。

この例なる「時、おそかりけむ」は、一の單文にて、他の文の中に

挿入文

挿み入れられたるなり。かゝるを**挿入文**といふ。

例二。　友、花咲きぬ、と告ぐ。

この例の中の「花、咲きぬ」、といふ單文は、豆爾乎波の「と」の添はりて、全文の説明語なる「告ぐ」の客部となれるなり。かくの如きをも、挿入文と見る。

例三。　かれは、暇なし、とて來ず。

この文の「暇なし」も、挿入文にて、豆爾乎波の「とて」の添はりて、説明語「來ず」の修飾語となれるなり。

例四。　古人も、年月は、流るゝごとし、などいへり。

この文の「年月は、流るゝごとし」も、挿入文にて、接尾語の「など」の添はりて、説明語「いへり」の修飾語となれるなり。

聯構文と、挿入文ある文とを、**複文**といふ。複文は、主語、或は、

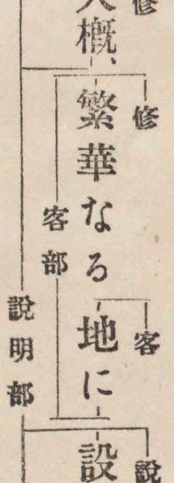
複文

説明語を、二箇以上、具ふるものなり。

次の諸文を解き、その單文なるか、複文なるかを分ちて、更に、複文にては、その聯構文と、挿入文ある文とを區別せよ。

例。　銀行は、大概、繁華なる地に設けられてあり。

右は、單文なり、分てば次の如し。



「設け」(下二段、第一轉)、られ」(所相、第二轉、連用法)、て」(過去、第二轉、連用法)、あり」(良行變格、第三轉、第一終止法)、は、相連りて、一つの説明語となれるなり。

例。　太刀を取れば、人を斬らむと思ふ。

右は聯構文なり、略せられたる語を補ひて、次の如く

分つ。

（人々）主　太刀を客　とれば説　（人々）主　人を斬らむこと客部

思ふ説。

「人を斬らむ」の句は、豆爾乎波の「と」に接して、説明部なる「思ふ」の客語となれるなり。

すべて、文を解かむには、かくの如く、先づ、省略せられたる語句を補ひおくべし。

例　われは、かれが歸りたりやを知らず。

これは、複文にて、中に、挿入文あり。

われは主　『かれが主　歸りたりや』を客部　知説らず。

「かれが歸りたりや」、は、單文に成れる挿入文にて、これを豆爾乎波の「を」にて承けて、全文の説明語「知らず」の客部となせしなり。

一、萬事は、一心の置所より生ず。
二、人は怒るとも、怒らじ。
三、父母の恩は、山よりも高く、海よりも深し。
四、滿艦の將士、やがて、祝宴を舵樓に張る。
五、總代は、祝辭を、天にひゞけと讀み上げたり。
六、食物は、口より入りて、胃に下るなり。
七、心臟と肺臟とは、暫くも休まずして働く。
八、いかりは、敵と思へ。
九、いつしか雲はれて、玄界灘、月清し。
十、家貧しくとも、かせがば、遂に、富む身とならむ。
十一、競技者は、おのれこそ、優勝旗を獲め、と勇み居たり。

十二、他の短を擧げて、己が長をあらはすことなかれ。

十三、儉約を專として、無益の費なき樣に、心を用ゐるべし。

十四、勝つ事ばかり知りて、まくる事を知らざれば、害、その身に至る。

十五、怒と慾とをすてゝこそ、心は常に樂しめ。

十六、小人は、己れあることをのみ知りて、人あることを知らず。

十七、箱館より、北海丸といふ汽船に乘りて、西南へ向ふ。

十八、秀吉、餘力を用ゐて朝鮮を征伐せしかど、中途にして薨じたりき。

十九、敎師は、誰かこの問に答へ得る、と問ひしに、最小き一人の生徒、我れこそ試みるべけれ、とて、進みいでき。

二十、去年、わが軒端に巢くひし燕は、いかにしけむ、今年は、かへり來ず。

廿一、人心、次第に、德川氏に背きしかば、第十五代將軍慶喜、遂に、大政を朝廷に奉還せり。

廿二、腦髓は、一家の主人の如く、身躰の萬事を支配し、常に、何々の事を爲さむ、何々の事をいはむ、など考へつゝあり。

廿三、心だに、誠の道にかなひなば、いのらずとても、神や守らむ。

尋常の結法

第六章。結法。

第一節。尋常の結法。

例。水は、水素と酸素とにて成る。時計は、正午を報ず。兵力、甚だ強し。鼠、猫に捕へらる。母、子を眠らず。敎師、生徒に軍歌を唱へしむ。これ、善からむ。かれ、卒業しき。

右の例の如く、尋常、文を結ぶには、その說明語たる動詞、形容詞、助動詞の第一終止法を用ゐる。これを、尋常の結法とす。

第二節。「ぞ、なむ、や、か、」の結法。

例。水は、水素と酸素とにてぞ成る。時計は、正午をなむ報ずる。兵力や、甚強き。鼠や、猫に捕へらるゝ。母、子をか眠らする。敎師、

「ぞ」「なむ」「や」「か」の結法

生徒に軍歌をぞ唱へしむる。　これなむ、善からむ。　かれや、卒業せし。

この例の如く、文中に、豆爾乎波の「ぞ」、「なむ」、「や」、「か」、の加れる時は、その末を結ぶに、動詞、形容詞、助動詞の第二終止法を用ゐる。　これを、「ぞ」、「なむ」、「や」、「か」の結法とす。

第三節。「こそ」の結法。

例。水は、水素と酸素とにてこそ成れ。　時計こそ、正午を報ずれ。　兵力こそ、甚強けれ。　鼠、猫にこそ捕へらるれ。　母、子をこそ眠らすれ。　教師、生徒に軍歌をこそ唱へしむれ。　これこそ、善からめ。　かれこそ、卒業せしか。

右の例の如く、文中に、豆爾乎波の「こそ」の加れる時は、その末

「こそ」の結法

命令、禁止の結法

を結ぶに、動詞、形容詞、助動詞の第三終止法を用ゐる。　これを、「こそ」の結法とす。

以上三様の結法は、前に、既に、委しく説きたり。

第四節。命令、禁止の結法。

例。てふ〳〵、菜の葉にとまれ。　おきよ〳〵、時のすゞめ。　少し、思へる所を述べしめよ。　朝に溫めて、夕に冷すことなかれ。　片時も、君と國とを忘るな。

この例の如く、命令法、及び、説明語を修飾せる禁止の副詞も、文を結ぶ。　これを、命令及び禁止の結法とす。

第五節。挿入文の結法。

例。一。われ、かれを訪ひしに、「客ありしなるべ

し、』あはで歸りき。

例二。われ、かれを訪ひしに、『客やありしなるべき、』あはで歸りき。

例三。われ、かれを訪ひしに、『客こそありしなるべけれ。』あはで歸りき。

例四。われ、かれを訪ひしに、『暫し待ち給へ、』とて、別室に導かれき。

例五。われ、かれを訪ひしに、『今夜は、歸り給ふな、』とて、夜すがら、昔語しき。

右の例の如く、挿入文は、各自に、前に說ける結法に準じて、三樣の終止法、或は、命令、禁止にて、その文を結ぶ。これを、**挿入文の結法**とす。

第六節。聯構文の結法。

例一。雨は、强かりしかど、風は、吹かざりき。

この聯構文は、「雨は强かりき」、風は吹かざりき」、の二單文にて成れり。上なる文は、下なる文に聯絡せむが爲に、その尋常の結を轉じて、下なる文の結「き」を存したるものなり。

例二。雨ぞ、强かりしかど、風は、吹かざりき。

この聯構文は、「雨ぞ强かりし」、風は吹かざりき」、の二單文にて成れり。これも聯絡によりて、上なる文は、その第二終止法の結を轉じ、下なる文は、その尋常の結を存したるなり。されば、「雨ぞ、强かりしかど、風は、吹かざりし」、など結ぶは、誤なりと知るべし。

例三。雨こそ、强かりしかど、風は、吹かざりき。

この聯構文は、「雨こそ、強かりしか」、風は、吹かざりしか」、風は、吹かざりき」の、二單文にて成り、亦、上なる文の第三終止法の結を轉じて、下なる文の尋常の結を存したるものなり。されば、「雨こそ、強かりしかど、風は、吹かざりしか」、など結ぶは、誤なりと知るべし。

一文の、他の文と聯絡するものは、その結を轉ず。これを、**聯構文の結法**とす。

次の諸文の結法を説明し、その誤れるは正せ。

一、急がばまはれ。

二、せいては事を爲損ずる。

三、わが同胞よ、國の爲につくせ。

四、父上は、誰かこの樹を切りきと、問はせ給へり。

五、千里の道も、あしもとよりぞはじまれり。

六、民をおぼしめす御心に、大御衣や脱がせ給ひき。

七、あな面白の今日の日や、暮れなば暮れね。

八、昔も今も、かく咲きにほふ、花にはそむく、人ぞなし。

九、瞬くひまには、山をおほひ、うちみるひまには、海をわたる、雲てふものこそ、くすしくありけり。

十、百鳥、千鳥、來よ、來よ、來よ、と囀る。

十一、今こそ落ちぶれたれど、われも、昔は、槍一すぢの主なりき。

十二、わが、俄に歸國せしは、君や知らざりし、弟の病を訪はむとてなりし。

十三、學の窓に起ふして、幾年月を睦みきぬる、心はいつか忘るべき。

十四、友は、わが書とかれの書とを、換へむとぞいへど、われは、これもをしく、かれもほしゝ。

十五、これを聞きし時よりぞ、わが心は、人こそ知らず、一日も安きことなかりしか。

十六、われは、かゝる過を、ふたゝびすまじとぞ誓ひぬ。

十七、わが友のいとこなる人は、よくこそ來給ひつ、などいひて、さまざまもてなす。

十八、亂るゝ露は、玉と見え、かをれる風は、身にぞしむ。

十九、母上ぞ、危き所に近寄るなとかねてより戒め給へるを、もし怪我したらむには、いかゞせむ。

二十、かくてこそ、今の世も、竈の烟、み空にもあまるまで、たちみちぬらむ。

第七章。　呼應。

例。君行けば、僕も行く。　水清ければ、大魚棲まず。

理由を告げれば、人怪む。

「ば」は、甲の語句と、乙の語句とを連絡せしむる豆爾乎波なり、且、右の例の如く、この語の、動詞、助動詞の第五轉と、形容詞（若しくは、活用の、形容詞に似たる助動詞）の第四轉とを承くる時は、既定の意を成すが故に、他の語句もこれに伴ひて、既定の意をいふ語を用ゐるを則とす。

例。君行かば、僕も行かむ。　水清くば、大魚棲まじ。

理由を告げずば、人怪まむ。

この例にては、「ば」は、動詞、形容詞、助動詞の第一轉を承けて、未定の意を成すが故に、これに伴ひて、次の語句にも未定の意

をいふ語を用ゐて、上下の語義を相應せしむるを則とす。

例。君行くとも、僕は行かじ。　水清くとも、大魚棲むべし。

理由を告げずとも、人怪まざらむ。

「とも」は、未定の意をいふ豆爾乎波なれば、上に、この語の用ゐられたる時は、下も、また、未定の語もて、これに應ずべきこと、この例の如し。

例。君行けども、僕は行かず。　水清けれども、大魚棲めり。

理由を告げれど、人怪まず。

「ど」、「ども」は、既定の意をいふ豆爾乎波なれば、この語を用ゐて、甲の語句を、乙の語句に連絡せしむる時は、乙の語句にも、これに伴ひて、亦、既定の語を用ゐるべきこと、右の例の如し。命令法も、未定の語を承くること、次の如し。

轉居せば、報知せよ。面白くば、讀め。問はれば、答へよ。急ぐとも、まはれ。遲くとも、歸れ。居らずとも、待て。

これ、命令は、未然に屬するものなればなり。

例。反對者は、競爭を始めたれど、功なからむ。出席者少けれども、今より開會せむ。差支あれば、明日行かざらむ。

この例の如きは、既定の後を、未定にて承けたれど、こは、各自にその時を異にせるなり。これらは、文の前後の意義によりて、用ゐ分くべし。

上下の語義を、互に相應ずるやうに、語句を用ゐるを、呼應とす。

以上述べたるは、未定と既定との呼應なり。

次の諸文の呼應を說明し、てその誤あるをば正せ。

一、巡査、賊を追ひたれど、捕へずして還れり。
二、御手許に御座候へば、御かし下されたく候。
三、精神一たび到れば、何事か成らざらむ。
四、君知らずば、われ敎ふ。
五、明日、よき天氣に候へば、こなたより御誘申べく候。
六、御注文あれば、直に店員を差出すべし。
七、御さしつかへなければ、必ず御來會あれ。
八、かれに聞けるも、かれも知らずといへり。
九、今までは、東軍敗れたるも、最後の勝は、この方にあらむ。
十、先祖なくば、いかでか父母あらむ。
十一、かなたを眺めば、富士山、美しく見ゆ。
十二、このあたりに、塵芥をすつれば、衞生に害あらむ。
十三、路遠くば、勞るゝものあり。
十四、われら、かれに、多額の金を惠むことを得ざるも、義捐の勸誘には、

十分に奔走すべし。

十五、御受納なし下され候はゞ、うれしく存じ候。

十六、今より後、かれに遇へば、必ず酬いむ。

十七、いかなる障碍に遭ふも、立てたる志をばまぐるなかれ。

十八、我が兵、山上より砲擊せば、敵も、よくこれに應ず。

十九、わが發明によりて、幾許かの世務を開くことを得れば、わが望、足りなむ。

二十、君が代は、かぎりもあらじ、長濱の、まさごの數は、よみつくすとも。

次の漢文を、正しき國文に書き下すべし。

一、棄欲思義、何不和之有。

二、和則相依濟事、不和則各敗、汝等勿忘。

三、竄伏而過、敵必追矣、示勇可也。

四、公若爲大將、逆櫓千百、聽公所爲。

五、我熟思汝晝間之言、寢而不能寐。

六、異日、如不幸而有風塵之警、安得享今日之樂乎。

第八章　溫習雜題

次の諸文に誤あらば、正すべし。

一、今宵、この良夜にあふて、そぞろに、故園の秋色なむしのばる。

二、老ひゆく身を忘れて、只管、その子の成人を待つ、親の心ぞあはれなり。

三、幾年、螢雪の功成りて、今年、めでたく卒業するこそ、たのしき。

四、卒業生一同、記念の爲に、この樹を栽ゆる。

五、松杉などは、冬にも、葉の落つことなし。

六、博物學なるものゝ、天然物よ就ゐて、利用厚生の道を知らしむものなり。

七、久しく當地に滯在されたる某教授は、此度、米國留學を命じられたれば、昨日、横濱へ向け、出立たれたり。

八、わが從兄なる人は、ケムブリッヂ大學の業を卒りて、本月初旬、歸朝せり。

九、われ、昨日の正午、かれにあひし時、かれは、今日と明日の午前中は、家に居るべし、とわれに語りき。

十、昨日は、終日、御待申せしに、つひに御入來なくて、淋しふ日を暮らし候。

十一. 人と約束を結びて、これを違ふときは、永く信用を失ふべし

十二. 學校は、よきことをこそ敎へ、あしきことは敎へぬ.

十三. われ、學ばむと欲せど、今は暇なし、などいふものは、竟に得學ばずして死ぬ人なり.

十四. 志ある者は、たとひ障碍に遭ふも、事終に成る.

十五. 生徒は、監督敎員より、成績通知書を與へられば、保證人に示して、その檢印を受くるべし.

十六. 今のうちに改めざれば、後に悔ゆるも及ばず.

十七. 君子は、渴するとも、盜泉の水を飲まず、

十八. 巡査は、懇に、その心得ちがいを諭せしかば、男は、いたく耻ぢ入り、過をわびて引取りけり.

十九. わが父は、有志者に推薦されて、市長候補者たることを諾し、由なり.

二十. 八月十四日、聯合軍、北京を攻めり、敵は、頑固に抵抗しゝも、同日夕、日本軍は、城門を破りて入り、久しく安否の案ぜられたる公使以下を、無事に救へり.

二十一. かれ、一旦は、勢を得るといへども、必ずその終を全ふせず.

二十二. 誓ふて君の恩に報いるべしと、わが弟は、泣ひてわれに語りぬ.

二十三. 將軍、戰へば必ず勝ち、攻めば必ず取る.

二十四. 大川の中流にて、某學校の生徒、ボートを覆せしに、乘れる者ども、みな、泳ひで陸へ上れり.

二十五. 白や早き、赤や遲しと、見物人は、脇目もせず、勝負いかにやと、うちまもれり.

二十六. われは、ありし樣を見て、いたく心に感じゝ、かくはしるせしなり.

二十七. 吾が友、ゆゑありて、すみかを田舍に移せしが、めづらしくも、今日訪ひきつ.

二十八. 青々としたる山、近く聳へて、清き小川、ゆるく家の傍を流れり.

二十九. 秀逸なる者へは、本誌一部、進呈す、競ふて投稿あれ. 用紙は、半紙に限る、但し、郵便はがきを用ゆるも、妨なし.

三十. わが同窓の友なる人に、齋藤なる人あり、この人、器用なるたちにて、學術技藝、一とほり、心得ざるといふことなし.

三十一、かゝる人を友とせば、惡に陷らず。

三十二、感冒を治さむには、いかなる藥を用ゆべきや。

三十三、君に問わむ、東京は、大阪より寒きや。

三十四、諸君は、この問題を、いかに解釋せらるゝや。

三十五、かれらの論じゝ主意と、僕の意見とは、大に異なれり。

三十六、豫算を立てずして、事業を起せば、損失を生じたり。

三十七、社員は、競爭者に遇うとも、決して逃ぐるまじきとの決心をなし居れり。

三十八、かくまでに國家につくす人こそ、ありがたき。

三十九、汝は、十分間に、かの山巓に達することを得るや。

四十、山の櫻花、今ぞさかりなれば、今日こそ行きて見むと、心ある友だち三人と、共に出でたちぬる。

四十一、渡場へ立ちて船を呼ぶも、舟人、睡りて答へず。

四十二、瀧のあるところへいづるには、右に行くべきや。

四十三、かの童こそ、よく知りたれば、雇ひて案内さすべしとて、手を叩ひて招きぬ。

四十四、庭の櫻花は昔の如く開きたるといへども、去年の今日、共にめでながめし母上は、今おはさず。

四十五、五十哩以上の切符を所持さるゝ乘客は、左記の驛に限り下車し、通用期限内、再び、後の列車に乘つぐを得る。

四十六、仰げば、富士の頂には、千年の雪白く、俯せば、琵琶の湖には、萬頃の浪青し。

四十七、義和團匪の亂なるものは、基督教、そのものを排斥するが爲に起りたるにあらずして、基督教徒たる不良民と、非基督教徒たる良民の衝突の爲に起りしなり。

四十八、台德院殿、御臺所に向はせ給ひ、かれが今の心にて生立ちたらむには、竹千代殿の爲には、雙なき忠臣にてこそ候はむと、殊の外によろこばせ給ひける。

四十九、もの、ふの、矢走の渡、近けれど、いそげばまはれ、瀨田の長橋

五十、今日よりは、枝こそたわむ、菊の葉に、夕露しげく、おくにやあるらめ。

次の漢文を、正しき國文にかき下すべし。

一、汝聞之何益。

二、汝亦有志聖人之道乎。

三、清請和於我、本威海衛之戰也。

四、正行請從共死、正成叱之起、正行揮涕而去。

五、蜂谷貞次、初心期一番槍、聞其爲人所先、不悅。

六、應擧爲人寫所謂幽靈者、有婢女視之、昏倒氣絕。

七、人各有黨、非黨而交、非獨不相容、將有悔不可追者。

八、義家見飛雁亂行曰、是江帥所敎、必當有伏、分兵圍之、果有伏。

九、源親房深嘆中興不終、皇統垂絕、乃推本皇祖建國之意、爲正統記。

十、人少則恃於年、氣盛動於物、恃於年、而動於物、惰嬉之所由生也、惰嬉生、則一生之計亦荒矣。

修正 日本文法教科書下卷 終

おくがき

ひと日、相知れる中學敎員のそれがし、おとづれきて、さま〳〵學問話しせし中に、言ひいでけらく、先生の日本文典、よきはよし、されど、その叙述の體裁、初學に說き敎ふるにかたし、いかなる名著なりとも、敎育に普及せぬは、遺憾におぼさずや、更に、中學初級の敎科用に適切ならむやう改作せられば、その効ます〳〵大ならむといふ、おのれ答へけるは、おのれが文典中の分類叙述等には、新開創闢の說のみ多かり、新說を立てゝ、人にうけがはせむには、一々證例を示さずはあるべからず、よりて、出典用例等には、紀、記、萬葉、さては、何集、何物語、類に觸れて、その語句を擧げつらねて、その說の杜撰ならぬを證したり、されば、初は、たゞ斯道の人々の同意を得むことを要として、初學の難解などは、已むことを得ずとせしなり、然るに、おのれが文典、世に出でしより、はや數年にして、今は、我が說、さいはひに世の同意を得たるかとおもはるゝは、近出の他の文典中の分類等の、おほかたは、我が說に從へるを見て知らる、我が新說、すでに世に容れられ、斯道の學說、ほゞこゝに定まりしうへは、今は、一々典語を引きて、立論を證據立てむ要なかるべきか、抑も、中學初級の敎科用にとては、叙述の體裁、いかなるが適切なるゝと問ひければ、やつがれ、年ごろ、中等敎育に從事して、いさゝか經驗せしところあり、順序は、かく〳〵あらば妙なるべく、例語例題

等、しかく〳〵にて可ならむ、字句は、殊に平易なるべく、用例は、きはめて〳〵卑近ならずはあるべからずなど、一々例を示して、精細に説き聞かせたり、その説けるところ、おのづから、泰西教育家の説にもかなひて、その理ゐるに似たれば、その忠告に從ひて、別にあらたに編せしもの、この書にて、すなはち、こゝろみにこれを刊行して、教育界の批評に付す、初級の教科に充つべきかゝる體裁の著作は、おのれが最も短所とするところにて、その淺薄なる、はなはだ恥ぢおもふところにはあれど、白龍も、時としては魚服す、漁人のあなどりも、教育のためには、我れ、あまんじて受くべし、かし、

此書を、前作の文典にくらべて、動詞、形容詞、助動詞の表の第一二三階にありし終止、連體、不定法を、第三四五階に置きかへたるは、某氏の強ひて請ふことありしによりて、此書にのみ、しばらく枉げてせしわざなり、全く我が持論を變じたるにはあらず、又、助動詞の「半過去」「過去」「大過去」を、「過去」のひとつに合せたるは、かならずしも區別せずして可ならむと思ひかへてなり、その外、前作の文典にくらべて、省略せしところ多きは、もとより初級の用なればなり、

明治三十三年十月　　假名の舍のあるじ、文彦ちるす、

明治三十三年十一月七日印刷　明治三十三年十一月十日發行
明治三十四年八月十日修正印刷　明治三十四年八月十三日修正發行
明治三十四年十月十日修正印刷　明治三十四年十月十三日修正發行
明治三十六年一月十五日第四版印刷　明治三十六年一月二十日第四版發行
明治三十七年一月一日第五版印刷
明治三十七年一月五日第五版發行

修正日本文法教科書奥附
毎冊定價金參拾錢

著作權所有

著者兼發行者　北豐島郡日暮里村大字金杉二百五十八番地　大槻文彦
發行者　東京市小石川區小日向水道町七十三番地　西野虎吉
發行者　大阪市東區北久寶寺町四丁目百六番屋敷　三木佐助
印刷者　東京市京橋區築地三丁目十五番地　野村宗十郎
發行所　東京市小石川區小日向水道町七十三番地　東京開成館（長距離加入）電話番町三五五番
發行所　大阪市東區心齋橋通北久寶寺町角　大阪開成館（長距離加入）電話東局八〇七番

（株式會社東京築地活版製造所印刷）

太平洋横断

航海長

源直光